



Pure Pacific 純パ No.174 Jul.2014

純パの会会報『純パ』第174号

2014年7月26日発行

発行：純パの会 〒161-0032 東京都新宿区中落合3-13-1 塚原方

オールスターゲーム

影山 一義

交流戦が始まって以降、オールスターゲームへの期待感が薄まっていると言われることが多い。

その理由として、パ・リーグとセ・リーグという組み合わせによる「夢の対決」という要素は、およそ1カ月前におこなわれた交流戦において、あらかた実現してしまっていることが多く、また各チームを代表するスター選手が一同に揃うという光景は、プロ選手が参加可能になったオリンピックや、ワールド・ベースボール・クラシックなどの国際試合のたびに編成される日本代表「侍ジャパン」によって、よりレベルの高い選手が集結することで、稀少感が少なくなったと言われる。

だからといって、オールスターゲーム自体がつまらなくなったりかといえ、それはないと思う。むしろ、自チームの成績に直結する交流戦や、国の看板を背負って立つ国際試合とは違う、のびのびとしたプレーを見ることができ、本来野球の持つ楽しさを味わうことができるのは、オールスターゲームならではの点であるし、さらに付け加えて、たとえ出場選手たちがそう思わなくなったとしても、われわれ純パの視点で見れば、交流戦や日本シリーズ同様、パ・リーグがセ・リーグを倒すことを期待して見ることができるといえる点においては、まだまだ十分その役割があるように思う。

今年のオールスターゲーム。ここ数年続いていた3試合制から2試合制に戻り、第1戦の西武ドームでは敗れたものの、地元であるライオンズ

岸の好投を堪能し、第2戦の甲子園では大谷対藤浪の速球主体の投げ合い。一転してパの二番手で登場した金子千尋の変化球勝負。そしてペーニャ、柳田、陽岱鋼といったパ・リーグ打線の猛打が爆発しての12得点での快勝。セの側ではカープ勢の大活躍等々、1勝1敗とはいえ非常に見ごたえのあるオールスターゲームだったように思う。

ところが、そこに水を差したのが、テレビ中継。2試合とも延長なし。BSやCS、マルチチャンネルへのリレーもなし。試合の中継より解説やゲストと称して登場する芸能人のどうでもいいトーク、インニングの合間には自局のイベントの宣伝。せっかく面白い試合が展開しているというのに、かんじんのテレビ局がそれを台無しにしているという状況。プロ野球視聴率の低下というのは、テレビ局自らが進んで落としているんじゃないかとさえ考えたりもする。一方、普段見ているパ・リーグの試合は、有料とはいえ、試合開始から終了まで完全中継。加えてパ・リーグTVでPC、スマホ、タブレットなどでいつでもどこでも見ることができるといふ環境を知ってしまうと、いまのテレビ局は何を考えているんだと思わざるをえない。

ちなみにオールスターゲームのチケットは今年も早々に売り切れてしまったのだが、西武ドーム、甲子園あわせて76334人の観客を記録し、2試合制での最多記録となったという。今年のオールスターゲーム、やっぱり球場で観たかったなあ。